

中層曲している方の道は、幅が50cm～26m、傾斜角は2～82°であり、矩形の道の方が傾斜がやや大きいと言えよう。

(3) 永迫平遺跡（日置郡伊集院町下谷口）

住居跡9軒のほか、連穴土坑3基、集石10基、土坑多数が確認され、他に形状は住居跡と似ているものの、床面が完全には形成されていないことなどから住居跡と認定できない大型の方形をした土坑も検出されている¹¹⁾。

遺跡は3本確認され、台地のはほぼ西側の中央部からそれぞれ北側と西側に延びている。1本は北側から北にはほぼ直線的に急傾斜で下っており、もう1本は東側から一旦東に急傾斜を下りた後、北側に直角に曲がってそのまま傾斜を強めながら北に下りている。さらにもう1本は、西側から北へ、また、西や南へと曲がりながら緩やかな傾斜で西へ下っており、最終的には小さく北に向かっている。

それぞれの計測値は、北側の1本が幅26～52m、傾斜角が8.5～11.1°であり、東側の道は幅が14～8.2m、傾斜角は4.6～7.6°である。また、西側のものは幅が17～5.3m、傾斜角は2.2～7°となっている。これから見ると、北側のものは一様に傾斜が急であるのに対して、ほかの2本の場合ははじめは緩やかであるものの、その後は急傾斜になると言えよう。



第3図 永迫平遺跡検出の道跡

(4) 上山路山遺跡（日置郡伊集院町大田）

住居跡などの遺構は検出されておらず、道跡だけの検出である¹²⁾。

遺跡は台地の南の端部に当たり、遺跡の南側に急傾斜で下りる2本の道が確認されたが、この道は下の方で1本につながる。つまり、台地上の2つの方向からそれぞれ谷に下りる道があり、その2本の道はある程度下った段階で合流しているということである。検出された2本の道のうち、北側の長いものを本道とし、南側の短いものを支道として説明を行ないたい。

本道は、幅が90cm～25m、傾斜角は6.6～17.5°であり、支道は幅が14～23m、傾斜角8.8～17.5°である。いずれも他の遺跡の道跡よりも傾斜が急であるのは、確認された

場所が台地の上ではなく斜面であったからであろう。

ここでは、硬化面もはっきりしており、航空写真でも周囲の自然な傾斜面とは明確に異なっていることが確認されている。

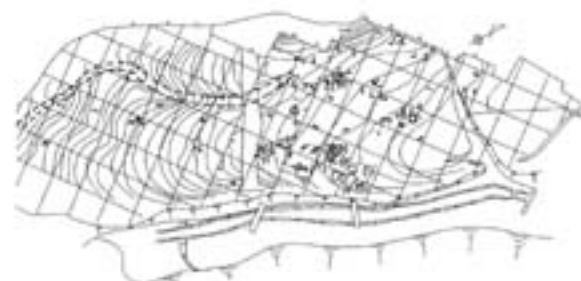
支道ばかりでなく本道についても、台地上との接点というか、つながる先が用地外であるために確認できなかったことは残念である。もし、接点が検出できていれば、台地上から下の谷に下りる道の在り方の全体像が明確になったであろうと考えられる。

(5) 加栗山遺跡（鹿児島市川上町）

発掘調査された範囲のはほぼ南西部に割合に明瞭な凹みが見られ、若干の硬化面も見られたとの調査担当者の話も含めて、道跡と推定できる¹³⁾。

幅40m程の痩せ尾根上に、住居跡17軒や集石17基、連穴土坑や土坑など合わせて76基などが検出されている。道跡はこの痩せ尾根に上がってくるものと考えられ、幅は1.6～2.4m、傾斜角は1.9～5.7°であり、割合に緩傾斜と言えるであろう。

この道跡は、中世には城が築かれた。そのため、東側の住居跡などの遺構の広がり方がこれで終わりとなるのか明確ではないが、北西部には住居跡があるレベルのコンターライン上に他の遺構が全く見られないことから、検出された道跡がこの遺跡の遺構の全部であると考えられ、その意味で意義深い。



第4図 加栗山遺跡検出の道跡

(6) 水迫遺跡（指宿市西方）

住居跡3軒、炊跡2基、それに多数の杭跡とともに2本の道跡が検出された¹⁴⁾。



第5図 水迫遺跡検出の道跡